世田谷村日記

石山修武

二月十七日

朝屋上菜園に上る。生ゴミを埋め、草花樹木に水をやる。水仙、クリスマス・ローズ等が咲いている。一時間程屋上で過し十二時過大学へ。十四時入試「空間表現」採点。この世にあり得ない植物を描けという問題で、仲々良いドローイングが多かった。今の若者も馬鹿にしたものではない。しかし、想像力のベースが違っている。我々の時代の想像力らしきは自然観察や実体験の組合わせから生まれたような気がする。世にこれ程まで情報が溢れていなかったから。対するに今の若い人達のそれは、映画やアニメーションの如き情報から生まれている。つまり、この世にあり得ないという問題設定自体が少々古めかしいのであって、マトリックスという映画があやふやな形式ではあるが示そうとしているように、今のこの世の現実自体も又バーチャルなのだという、情報化時代の特質が、高校生位の若い人達の才質の根幹にすでに侵入しているような気がする。それに深刻な事のように考えられもするのは、彼等が「この世にあり得ない」という指示を与えられなければそして入試という制度の中の指示がなければ、かくの如き想像力を動かさぬ事だろう。

二月十八日

朝屋上菜園にあがり、生ゴミを埋める。群生し始めた仏の座を引き抜く。雑草は強い。富士山が鮮明な姿で眺められる。今日は利根町の百人スクールへ出掛ける。考える時間が無い状態になっているのは解っている。しかし、今は仕方無いだろう。十一時前常磐線車中。クロード・レヴィストロースの悲しき熱帯、ゆっくり読んでいる。インディアン（原住民）の居なくなったサンパウロ郊外の風景と常磐線の車窓から眺めている都市、及び都市郊外の風景と、それ程の違いはない。この風景の無惨さの中を通り過ぎるのも又、旅なのだ。かって旅の時代があったと、彼は書いている。まだ風景が汚されていない、無垢な、それこそ民俗学者を狂喜させるような、それぞれの民俗が多様で個別な文化を所有していた頃の事だ。今は、恐らく地球上の何処にもそんな風景は存在していない。そんなに、大ゲサに言わなくても、常磐線からの風景中には、存在していない。汚されたと言うよりも、この風景は廃虚なのだ。私たちの都市の日常は廃虚の只中での生活なのだ。若者がバーチャル風景の中に逃亡したがるのは、極く極く自然なりゆきなのである。十一時取手。佐藤さん出迎え。佐藤宅で、昼食のソバいただく。十四時文間小学校。昨年会った子供達と再会。四十分のレクチャー。小学生から老人まで聴いているので仲々難しい。その後、文間小学校六年生十七名による「鎌倉街道」の創作オペラを観る。前回、利根町に来た時子供達には少々失礼な事を言ったので、今回は、悪かったな、とあやまった。十六時迄、百人スクールのこれからについて相談。桜植樹、たぶの樹植樹の件と、百人スクール事務局の場所の二件である。十七時過、利根町を去る。只今、十八時常磐線車中。夜は研究室で幾つかの打合わせをこなさなければならない。十九時研究室に戻る。打ち合わせ。二十二時過修了。二十三時過世田谷村に戻る。